



今月の題字  
中島恒夫さん

(桐生市新里町)

創立50周年を迎えた「わたらせ養護園」の施設長さん。広報紙「とんがりやね」を読んでいると、子どもたちへの温かい愛情が伝わってきます。

虹の架橋「検索」で、インターネットからでもご覧いただけます。

六月四日(日) ながめ余興場で  
富士路子浪曲の世界

ながめ余興場改修二十周年特別企画として、富士路子さんと東家若燕さんをお迎えして「富士路子浪曲の世界」を開催いたします。

浪曲は浪花節とも呼ばれ、三味線を伴奏に七五調の歌う部分(節)と語り(啖阿)を持つていて、笑いも涙溢れる大衆芸能です。

ながめ余興場地下の展示室には東家浦太郎、三門博、伊丹秀子など歴代の日本浪曲協会会長や大御所がながめの舞台を踏んだ時のチラシも残されています。現在の日本浪曲協会の会長でもある富士路



富士路子さん 日本浪曲協会HPより



いい話  
(文責・菊)《261》

小耳にはさんだ

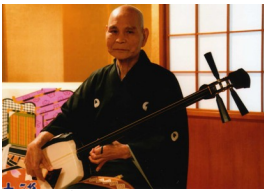
一番の母の日

熊本在住の大野勝彦さんは平成元年、農作業中に手を機械に挟まれてしまいました。「助け

に美術館を作りました。大野さんの詩画集「泣いて笑って」の中に「母ちゃんの講演会」というお話があります。

お母さんは機械の止め方を知らず、大野さんは両手を切断してしまいました。以来、お母さんは「勝彦が手をなくしたのは私のせい」と塞ぎ込んでしまいましたが、農業ができなくなり、詩や絵を書くようになった大野さんと、笑ってもらった大野さん、方々の「生きた」として、阿蘇の麓

昔は話好きで婦人会や民謡会でもよく挨拶をしていたが、今は母の話を聞いてくれる舞台はどこにもない。そこで連休明けの夜、「母ちゃん、今度の母の日に美術館で講演してね」と頼んだ。そのとき母は少しも慌てず、一言「わかった」。次の夜、そつと、部屋を覗くと、母ちゃん、猛特訓をしているのであった。当日、いっぱいのお客様を前に、私が前語り。



三味線の伊丹秀敏さん

富士路子浪曲の世界  
日時 6月4日(日)  
14時開演  
場所 ながめ余興場  
木戸銭 1,000円  
お問合せは足利屋へ

世界一小さな  
足利屋  
トイレ美術館

今月の写真《261》

粕川方宏さん『Vの風景』



粕川方宏さんは、ながめ余興場の館長として十年間、芝居小屋を支え、退職後は色々な地域活動に参加し、フォトクラブ「ぐるっぺ風景」の一員として趣味の写真を撮楽しんでいました。「Vの風景」と題する写真は、遠くに赤城山が見える風景でその場の空気が伝わってきます。「ぐるっぺ風景」では今年も恒例の写真展が開催されます。期日は五月三日から五日まで。会場は大間々町五丁目クラブ。十五名の会員の素晴らしい写真を今年も是非ご覧下さい。お問合せは黒内代表(09048285675)

「今日は特別企画、母ちゃんの話のはじまり始まり！拍手で迎えましょう。どうぞ」と母を呼び上げた。深々と頭を下げた母ちゃん。「トラクターから両手を引き抜いた息子、その血を見たとき、ああこれは死なねば仕様がな」と思いました。それが今、ニコニコと皆さんの前で元気でやっているんです。もう嬉しくて、嬉しくて」と絶句。そして、ずうっとこみ上げる涙をこらえて、目を閉じた。お客様もいつしかすすり泣き、母はとうとう座り込んで泣き出す始末。私は舞台上飛び上がり、「母ちゃん、よかバイ、よかバイ。稽古したごらしています」

と、母ちゃんがいつぱいしゃべるより、お客さんにはもっと伝わったよ」と背中をたたいてやった。一生忘れることのできない一番の母の日であった。昨年、熊本地震からちょうど一年後の四月十四日、閉鎖されていた美術館が再開されました。「母ちゃんにもう一度美術館を見せたい」という大野さんの一念でした。足利屋に大野さんの詩画があります。「人生いかに生きべきか。そんな難しいことわかりません。ただ、大切な人の喜びそうなこと考えて毎日暮らしています」

靖ちゃん日記

四月十五日(土)  
みどり市出身の漫画家・あはしるいさんの「あい・タイン」を読んだ。超面白い。マンガの題名のアイタインとは、都会出身者が地方に職を求めて定住すること。「あい・タイン」の舞台は群馬県「お花の形の夢里村」、主人公の港明は二十五才。田舎暮らしに憧れて古民家を買い、地元中学の社会科教師になる。隣りに住む山辺家の孫の路さんも明と同じ年で気が強い美人英語教師という設定。「ごせかやけるんね」、「大丈夫だろかね」、「そうじゃねんかい」、「ちっこんべー」といった上州弁が次々に飛び出してくる。高校を卒業するまでは群馬の言葉こそが標準語だと思いついていた。「寝おまつさか悪いんねー」と言ったら、東京人に「寝て餃子を食うこと？」と言われた。寝おまつさとは、寝る行儀作法(ぎょうさ)の略か？上州人は寝る時も行儀を重んじる上品な人間なんだんべかなーと思えた。いや、そうじゃあんめー。

静けさや湯舟に揺れる朧月  
毎年恒例の大間々街路灯組合の旅行で母畑温泉に泊まりました。「月待ちの湯」と書かれた大浴場は天井がガラス張り、露天風呂から見上げる夜空にはしっとりとした十六夜の朧(おぼろ)月が浮んでいました。この温泉の由来は八幡太郎義家の時代までさかのぼるこの旅館の敷地内には歴史を感じさせるお稲荷さんや二十三夜塔がありました。昔の人も名月を見上げながら肌がツルツルになるお湯につかっていたのかもしれません。旅館のシンボルマークも月をかたどったものでした。

